

Title	現代高校生のストレスと「学校要因」
Author(s)	片山, 悠樹
Citation	大阪大学教育学年報. 9 P.59-P.70
Issue Date	2004-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7268
DOI	10.18910/7268
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

現代高校生のストレスと「学校要因」

片山 悠 樹

【要旨】

現代高校生は「荒れ」ている。しかし、高校生の「荒れ」の状況には変化がみられる。その変化の大きな要因となっているのが「高校格差」である。

かつて、1970年代から1980年代にかけて、高校間の「格差要因」は、高校生の意識や行動に大きな影響を及ぼしていた。そのため、「高校格差」のなかで下位の高校において、非行・問題行動といった「荒れ」が目立っていた。しかし近年、大学入学の容易化や高校生の学歴意識の低下などにより、「格差要因」が現代高校生に与える影響力は弱体化しつつある。このような状況のなかで、非行・問題行動においても「格差要因」の影響を受けなくなっている。つまり、現代高校生の「荒れ」は、「進学校」—「非進学校」に関係なく、おこっているのである。

そこで本論文の目的は、「格差要因」が現代高校生の意識や行動に影響を与えてなくなっているいま、どのような要因がこれらに影響しているのか、ということを実代高校生の「荒れ」の背景にあるストレスから、明らかにすることを目的とした。

考察を通して、つぎのようなことが明らかになった。

- (1) 現代高校生は、高校卒業後にどういった進路に進むかという、将来的な展望からかならずしもストレスを受けてはいない。
- (2) いまの高校生活が充実しているか、または満足できるものか、という高校への意味づけを基準として、現代高校生のストレスが生じている。
- (3) 高校への意味づけは、高校での授業の理解度や学校内での学業成績により左右されている。

1、高校生の「荒れ」の変化

現代の子どもたちはまちががなく「荒れ」ている。高校生もその例外ではない。しかし、高校生の「荒れ」の状況には変化がみられる。

戦後、旧制の中等学校を廃止して、新制の高校が誕生した頃、高校進学率は50%にも満たなかった。しかしその後、高校進学率は一貫して上昇を続けることとなった。なかでもとくに、高度経済成長の時期には、産業構造の変化に加えて、ベビーブームによる生徒急増という背景のなか、高校教育に対する社会的要請が高まりをみせた。その結果、高校進学率は急速な伸びをみせ、高校教育は「大衆化」へと向かいはじめた。ちょうどその頃から、頂点と底辺との差が大きいピラミッド型の「高校格差」が明確なものとなってきた(麻生1979)。その後も高校進学率は順調に伸びていき、1974年にはついに90%を超え、「大衆化」の段階から「ユニバーサル化」の段階に達した。この頃には、高等教育機関への進学率や学業成績などを基準に序列的に並べられた「高校格差」は、以前より明確なかたちへと強化されていった。このような明確な「格差」は、高等教育機関への進学率や学業成績の「格差」だけにとどまらず、当時の高校生の意識や行動においても「格差」がみられる、と指摘された(米川1978・武内1981)。すなわち、中学校のときの学業成績によって、それぞれの「格差」に振り分けられた生徒たちは、高校で類似した集団へと再編され、それぞれの「格差」にふさわしい価値観や行動様式を身につけていたのである。

その結果、「高校格差」のなかで上位の高校の高校生は学校文化に対して適応的、肯定的な生徒文化を形成し、それに対して下位の高校の高校生は否定的、不適応的、または逸脱的な生徒文化を形成したのであった。このような「高校格差」が明確な時期においては、高校生の非行・問題行動といった「荒れ」は、下位の高校で多くみられたのである。

しかし、近年の大学進学率の急増による「大学全入時代」をむかえ、大学に進学することはかなり容易になっている。このような状況変化のなかで、「高校格差」と高校卒業後の進路との序列的な対応関係は、以前と比べてもほとんど変化していないが、現代高校生の学歴意識は低下し、学校適応や生活様式に「高

校格差」による差がみえにくくなっていると指摘されている（樋田他2000・尾嶋2001）。とりわけ、軽微な非行・問題行動からみると、現代高校生の意識や行動では「高校格差」がみられなくなっている（秦他2004）。このような一連の変化のなかで、現代高校生の意識や行動に影響を与えているのは、高校間の「格差要因」ではないと思われる。

そこで本論文では、「高校格差」が現代高校生の意識や行動に影響を与えてなくなっているいま、どのような要因がこれらに影響を与えているのであろうか、ということ明らかにしていきたい。

2. 「高校」の捉えかたと「高校」への適応

2・1 「日常生活の場」としての高校

「格差要因」が現代高校生の意識と行動に影響を与えなくなっているいま、現代高校生の「高校」の捉えかたに変化が生じているのではないだろうか。さらに、現代高校生の「高校」の捉えかたの変化にともない、「高校」への適応のしかたにも変化がおこっていると考えられる。ここでは、高校生の「高校」の捉えかたの変化を「選抜・配分」の場」と「日常生活の場」という2つの側面から考察し、「高校」への適応のしかたの変化についてみていくことにしたい。

1970年代から1980年代にかけて、高校生は、より高い教育達成は将来の社会的な成功の可能性を高める、といった連鎖的な関連を強く意識していた。そのため、当時の高校生は、より高い学歴を獲得するという文化的目標を広く受容しており、学歴獲得競争に参加していた（荻谷1995）。しかし、その競争過程において、より高い学歴を獲得できない高校生は、将来的な展望のなかで自らが低い地位にとどまることを予期し、欲求不満の状態に陥っていたのである（耳塚1980）。単純化すれば、業績主義的競争のなかで高校生は「勝者」／「敗者」をみずから認識していたのである。このことを考えると、当時の高校生は高校を、学業成績を基準にして将来の社会的地位が振り分けられる「選抜・配分」の場」として捉えていたと思われる。

このような高校の捉えかたは、高校への適応のしかたにも大きく関係してくる。高校が「選抜・配分」の場」として捉えられた時期においては、高校卒業後に大学へと進学する高校生は、みずから「勝者」と認識する傾向があり、高校へスムーズに適応していたであろう。そのいっぽうで、進学できない高校生は、みずから「敗者」と認識する傾向があり、高校への適応の度合いはけっして高くはなかったであろう。この時期においては、高校卒業後の進路の違いが高校への適応の基準としてはたらし、進学できない高校生は高校への適応過程において、ストレスが生じて、非行・問題行動といった「荒れ」をおこしやすい状況にあったと思われる。1970年代から1980年代にかけて、「敗者」と自己認識していた高校生たちによる、校内暴力やツッパリストスタイルなどの反抗的態度が多くみられたことは、これらのことを示しているといえよう。

では、現代高校生は、高校をどのように捉えており、またどういった適応のしかたをみせているのであろうか。

「大学全入時代」をむかえ、さらには高校生の学歴意識が低下しているいま、現代高校生は卒業後の進路の違いにより「勝者」／「敗者」とみずから認識することがあまりなくなっている、と考えられる。このような状況下においては、現代高校生は高校を「選抜・配分」の場」として捉える意識は薄らぎはじめ、高校を通過点として捉えているのではないだろうか。つまり、現代高校生は将来的な展望をあまり気にすることなく、いまの高校生活を楽しむといったことに比重をおいている、「日常生活の場」として高校を捉えている、ということである。

こういった高校の捉えかたの変化により、現代高校生の高校への適応のしかたは、かつての高校生とは異なる基準がはたらいっているのではないだろうか。現代高校生は高校を「日常生活の場」として捉えているため、卒業後の進路の違いという基準ではなく、在学している高校の「居心地のよさ」という基準が、高校への適応を左右すると考えられる。すなわち、在学している高校が自分自身にとって充実したものであるとか、もしくは意味ある存在であると感じている高校生は、その充実感や満足感ゆえに高校への適応

の度合いが高いと考えられる。そのいっぽうで、在学している高校が自分自身にとって充実したものであるとか、もしくは意味ある存在であるとあまり感じていない高校生は、高校への適応の度合いがあまり高くはないと考えられる。したがって、後者の高校生においては、高校への適応過程で、ストレスが生じて、非行・問題行動といった「荒れ」をおこしやすい状況にあるのではないだろうか。

そこで本論文では、在学している高校に対する充実感や満足感などといった高校生の主観的な評価を、高校への「意味づけ」と名づける。そして、高校への「意味づけ」と高校生の「荒れ」の背景にあるストレスとの関係を見ることにする。

ここでいう「意味づけ」とは、個人がある対象にどのような意味をみいだすかといったように、個人の意識にもとづいた概念ではあるが、自己のまわりに存在する学校、家庭または地域社会などの社会的な空間に規定されない個人の嗜好や性向といった概念ではない。それは、社会的な空間に規定されながら、その結果として個人が「下からの作用として」ある対象に主体的な評価を形成していくという概念である。なお、高校への「意味づけ」を考えるにあたり、ハーシのボンド理論を応用した(Hirsch 1969=1995)。ボンド理論の4つのボンドのなかでも、他者に抱く愛着や尊敬の念である「アタッチメント」と、合法的な活動にどのくらい参加しているのかという「インボルブメント」の2つに着目し、これらを1つにまとめた概念が「意味づけ」である。また、本論文では「高校への」といったように「意味づけ」の対象を限定しているため、「アタッチメント」に関しては、学校のなかで重要な他者である教師に対する愛着や信頼感に、「インボルブメント」に関しては、学校での当番の仕事や宿題などの学校の諸活動への参加に着目する。ハーシのボンド理論を応用した理由は、ボンド理論が「下からの作用として」社会に結びつくという個人を基軸とした概念であり、本論文で想定する概念と極めて近いためである。

2・2 高校への「意味づけ」の形成要因

では、高校に対する高校生の主観的な評価という、高校への意味づけは、いかなる要因により形成されているのであろうか。

さきに触れたように、1970年代から1980年代において、高校生は高校を「選抜・配分の場合」として捉えていたと思われる。そのような状況下では、「ある地域の中の高校間の序列は、・・・中略・・・その地域に住む人びとにとってはっきりしたものである。それぞれの地域社会では、どの高校を卒業したかということが、一生つきまとうことになる。」(Rohlen 1983=1988)と指摘されたように、高校間の「格差要因」が高校生に与える影響は強力なものであった。したがって、向学校的な生徒文化(脱)学校的な生徒文化が「高校格差」により分化していたように(菊地1986)、高校への意味づけにも「格差要因」が大きな影響を及ぼしていたであろう。

しかし、現代高校生は高校を「選抜・配分の場合」としてよりも、「日常生活の場合」として捉えていると考えられる。近年の高校生においては「向学校・向勉強志向および反・脱学校志向の原因をすべて学校タイプ・・・中略・・・に帰属させることの困難さ」があると指摘されているように(荒牧2001)、「格差要因」が現代高校生の高校への「意味づけ」に与える影響は弱体化しつつある。だが、現代高校生が高校を「日常生活の場合」として捉えている以上、高校内における処遇(スループット)が高校への意味づけに大きな影響を与えているのではないだろうか。つまり、現代高校生は教師やクラスメートとの相互作用をとおして、自分自身が高校のなかでおかれている状況はどういったものであるかを認識し、そのような認識にもとづいて、高校が自分自身にとって意味ある存在であるか、といった主体的な評価を形成すると考えられる。とりわけ、このような相互作用は、学校という一定の空間のなかで行なわれるため、無定形ではなく、教科指導や生活指導といった、比較的持続的な準拠枠のなかで行なわれることが多くなる。このように、現代高校生の高校への意味づけは、「格差要因」ではなく、「学校要因」から大きな影響を受けていると思われる。

ひとくちに「学校要因」とはいても、学校ではさまざまな教育活動が行なわれている。しかし、学校は授業を中心に組織されており、また授業において高校生は評価される存在であるため、「学校要因」のなかでも、授業や学業成績が高校生に与える影響がとくに大きいであろう。すなわち、高校での授業が理

解できる、または学校内での学業成績が上位の高校生は、自分自身がおかれている状況を肯定的に認識し、その認識にもとづいて高校が自分自身にとって意味ある存在であるといった、肯定的な意味づけを形成するであろう。そのいっぽう、授業があまり理解できない、または学校内での学業成績が下位の高校生は、自分自身がおかれている状況を否定的に認識して、高校が自分自身にとってあまり意味ある存在ではないといった、否定的な意味づけを形成すると考えられる。

そこで、高校での授業に対する理解度、学校内での学業成績、といった観点から高校への意味づけとの関係をみていく。

2・3 使用するデータと分析の手続き

本論文で使用するデータは、2001年に山梨県、大阪府、奈良県、福岡県、長崎県、鹿児島県の高校1・2年生を対象に実施された「高校生の生活意識に関する調査」である。調査対象校はすべて公立高校であり、サンプル数は3069人である。調査方法は、各高校を通した質問紙による集合調査法で、各高校の教師によって配布、実施された。学科・コースは多様であるため、授業内容に応じて、普通科、英語科、農業系学科、産業系学科に分けた。その結果、普通科74.1%、英語科3.4%、農業系学科4.4%、産業系学科18.1%となった。

本論文で用いる指標は前述の研究枠組みに沿って、ストレス、予定している進路、高校への意味づけ、そして授業に対する理解度・学校内での学業成績、の4つである。1つ目のストレスに関する指標としては、「学校のなかで『ムカつく』ことがある」、「はらがたつ」、そして「イライラする」、の3つの指標を用いる。それぞれの質問項目に対して「よくある ときどきある あまりない まったくない」の4段階から回答してもらった。2つ目の予定している進路に関しては、「あなたは今、高校卒業後の進路をどのように考えていますか」を指標として用いる。そして「四年制大学（一般入試） 四年制大学（推薦入試） 短期大学 専門学校・各種学校 就職 フリーター その他」の7項目から回答してもらい、それをもとに「大学・短大 専門学校・各種学校 就職 その他」の4つのカテゴリー分けをした。3つ目の高校への意味づけに関しては、アタッチメントにおいては「先生に信頼されている」、「（高校で）好きな先生がたくさんいる」の2つの質問項目を用い、またインボルブメントにおいては「給食・掃除・日直など、当番の仕事をきちんとする」、「宿題をいつもやってくる」の2つの質問項目を用い、高校への意味づけの指標とする。それぞれの質問項目に対して「とてもあてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない まったくあてはまらない」の4段階から回答してもらった。最後に、授業に対する理解度・学校内での学業成績に関しては、「学校の授業がよくわかる」、「高校での成績」の2つを指標として用いる。前者においては、「とてもあてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない まったくあてはまらない」の4段階から回答してもらい、また後者においては「上位・中の上・中位・中の下・下位」の5段階から回答してもらった。

3. 現代高校生の「高校」への適応に関する分析

高校生の意識や行動、とりわけ「荒れ」においては、各個人が抱える状態が大きく関係してくる。とくに、高校生の一日の大半は学校で占められているため、かれらが抱える状態は学校との関係により大きく左右されると思われる。

学校はすべてが有効な時間として組み立てられ、絶え間ない監視が可能となっている。したがって、生徒たちのさまざまな活動は取り締まりが行なわれるのである（Foucault 1975=1977）。そのような状況で、学校にあまり適応できない生徒たちは、負の感情を抱き、衝動的に非行・問題行動を行なう、ということは十分に考えられるであろう。ここで、負の感情の一つであるストレスを例にとって、非行・問題行動との関係性をみてみると、ストレスを感じている高校生ほど、非行・問題行動を経験している⁽¹⁾。このように、高校生の「荒れ」の背景にはストレスが大きく関係しており、ストレスという側面から高校生の意識や行動に影響を与える要因について分析することは重要ではないだろうか。

そこで本章では、2章で述べた枠組みにそって、高校生のストレスを中心に分析を行なうことにしたい。

3・1 卒業後の進路とストレス

すでに述べたように、「大学全入時代」をむかえ、さらには現代高校生の学歴意識が低下するなかで、現代高校生は高校を「選抜・配分場」として捉えることはなくなっていると考えられる。そのため、より高い学歴が獲得できるか否かという将来的な展望が、現代高校生の高校への適応の基準としてはたらいていなくなっているのではないだろうか。そこで、これらのことを現代高校生が卒業後に予定している進路と、ストレスとの関係からみていく。

表の結果をみると、「大学・短大」、「専門学校・各種学校」、「就職」、そして「その他」といった、高校卒業後に予定している進路の違いによって、学校のなかで「ムカつく」ことがある、と回答している割合に大きな差はみられない（表3-1）。

表3-1 卒業後予定している進路×学校の中で「ムカつく」ことがある

単位：％

進路 \ ストレス	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	合計(N)
大学・短大	19.9	24.8	44.7	7.4	3.2	100.0(1514)
専門学校・各種学校	22.5	23.4	42.9	4.5	6.6	100.0 (662)
就職	22.3	21.9	44.3	7.1	4.3	100.0 (731)
その他	28.6	21.0	32.8	9.2	8.4	100.0 (119)
D.K.,N.A.	23.3	16.3	20.9	11.6	27.9	100.0 (43)
合計	21.4	23.5	43.4	6.8	4.8	100.0(3069)

表は省略するが、学校のなかで「ムカつく」ことがあると同様に、はらがたつ、イライラするにおいても、高校卒業後に予定している進路の違いによって、回答している割合に大きな差はみられない（はらがたつでは、「大学・短大」から順に、63.0%、69.0%、68.2%、69.7%、イライラするでは、66.2%、68.7%、69.8%、69.0%：数字は、「よくある」と「ときどきある」と足したものである）。

以上のことから、大学入学が容易化し、さらには現代高校生の学歴意識が低下しているいま、現代高校生は、高校卒業後の進路の違いにより、ストレスが生じているとはいえない。

3・2 高校への意味づけとストレス

現代高校生においては、将来的な展望からかならずしもストレスが生じているのではない。すなわち、現代高校生は高校を「選抜・配分場」として捉える意識が薄らいでいるのであろう。そうしたなかで、現代高校生は高校を「日常生活の場」として捉えて、高校に充実感を感じているかという高校生の主観的な評価が、高校への適応の基準としてはたらいているのではないだろうか。したがって、このような主観的な評価により、ストレスが生じていると考えられる。そこで、在学している高校に対する高校生の主観的な評価である、高校への意味づけと、ストレスとの関係を考察する。ここでは、高校への意味づけの、アタッチメントとインボルブメントのそれぞれについて分析する。

まずは、アタッチメントからみると、教師に対して愛着や信頼感を持っていない高校生のほうが、愛着や信頼感を持っている高校生に比べて、学校のなかで「ムカつく」ことが「よくある」、または「ときどきある」と回答している割合は高い（表3-2・3）。

表3-2 先生から信頼されている×学校のなかで「ムカつく」ことがある 単位：%

ストレス アタッチメント	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	合計(N)
とてもあてはまる	27.3	19.7	28.8	22.7	1.5	100.0(132)
ややあてはまる	15.9	26.5	50.2	7.2	0.2	100.0(831)
あまりあてはまらない	19.3	25.3	49.6	4.8	1.0	100.0(1386)
まったくあてはまらない	39.0	20.5	30.8	9.2	0.6	100.0(513)
D.K.,N.A.	10.1	10.1	15.5	3.4	60.9	100.0(207)
合計	21.4	23.5	43.4	6.8	4.8	100.0(3069)

表3-3 好きな先生がたくさんいる×学校のなかで「ムカつく」ことがある 単位：%

ストレス アタッチメント	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	合計(N)
とてもあてはまる	16.0	26.7	39.0	12.8	5.3	100.0(187)
ややあてはまる	15.8	21.6	50.2	8.7	3.8	100.0(887)
あまりあてはまらない	19.2	25.1	45.5	5.4	4.8	100.0(1358)
まったくあてはまらない	35.6	21.6	31.3	5.8	5.7	100.0(624)
D.K.,N.A.	30.8	30.8	15.4	0.0	23.1	100.0(13)
合計	21.4	23.5	43.4	6.8	4.8	100.0(3069)

はらがたつ、イライラするにおいても、同様の傾向がみられる(表は省略)。教師にまったく愛着や信頼感を持っていない高校生は、愛着や信頼感を最も持っている高校生に比べて、はらがたつ、イライラすることが「よくある」、または「ときどきある」と回答している割合が高い(「先生から信頼されている」に対して「とても当てはまる」→「まったく当てはまらない」について、はらがたつでは、73.9%→62.1%、イライラするでは、75.2%→60.6%、「好きな先生がたくさんいる」に対して「とても当てはまる」→「まったく当てはまらない」について、はらがたつでは、74.3%→58.8%、イライラするでは、71.8%→63.1%:数字については上と同様)。このことから、教師に対する愛着や信頼感といったアタッチメントが、学校のなかで「ムカつく」やはらがたつ、などといった高校生のストレスを左右しているといえる。では、インボルブメントに関してはどうかであろうか。表3-4・5をみると、学校の諸活動への参加が積極的でない高校生のほうが、参加が積極的な高校生に比べて、学校のなかで「ムカつく」ことが「よくある」、または「ときどきある」と回答している割合が高い、という傾向がみられる(表3-4・5)。

表3-4 当番の仕事をきちんとする×学校のなかで「ムカつく」ことがある 単位：%

ストレス インボルブメント	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	合計(N)
とてもあてはまる	20.4	21.7	44.0	9.7	4.2	100.0(814)
ややあてはまる	17.9	23.6	48.0	6.4	4.0	100.0(1326)
あまりあてはまらない	23.6	27.2	38.5	4.3	6.4	100.0(745)
まったくあてはまらない	43.7	14.4	28.2	8.0	5.7	100.0(174)
D.K.,N.A.	20.0	40.0	20.0	0.0	20.0	100.0(10)
合計	21.4	23.5	43.4	6.8	4.8	100.0(3069)

表3-5 宿題をいつもやってくる×学校のなかで「ムカつく」ことがある 単位：%

ストレス インボルブメント	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	合計(N)
とてもあてはまる	19.6	18.1	50.7	8.0	3.6	100.0(138)
ややあてはまる	15.8	24.2	49.8	6.4	3.8	100.0(827)
あまりあてはまらない	18.4	25.6	45.4	6.0	4.5	100.0(1232)
まったくあてはまらない	31.5	20.7	33.8	8.2	5.9	100.0(857)
D.K.,N.A.	13.3	26.7	13.3	13.3	33.3	100.0(15)
合計	21.4	19.0	43.4	6.8	4.8	100.0(3069)

表は省略するが、はらがたつ、イライラするにおいても、同様の傾向を示している。学校の活動への参加が最も消極的な高校生は、最も積極的な高校生に比べて、はらがたつ、イライラすることが「よくある」、または「ときどきある」と回答している割合が高い（「当番の仕事をきちんとする」に対して「とても当てはまる」→「まったく当てはまらない」について、はらがたつでは、77.0%→62.4%、イライラするでは、72.4%→65.5%、「宿題をいつもやってくる」に対して「とても当てはまる」→「まったく当てはまらない」について、はらがたつでは、68.5%→59.4%、イライラするでは、68.9%→63.1%：数字については上と同様）。このことから、当番の仕事や宿題といった、学校の諸活動への積極的な参加というインボルブメントも、アタッチメントと同様、学校のなかで「ムカつく」やはらがたつ、などといった高校生のストレスを左右しているといえる。

以上のことから、教師に対する愛着や信頼感であるアタッチメントや、学校の活動への積極的な参加であるインボルブメントといった、高校への意味づけが弱い高校生のほうが、高校への意味づけが強い高校生に比べて、ストレスが生じやすいといえる。現代高校生においては、いまの高校が充実したものである、もしくは意味ある存在である、といった在学している高校の居心地という基準がストレスと関係している。

3・3 高校への意味づけと「学校要因」

では、教師に対する愛着や学校の活動への参加といった、高校への意味づけは、どのような要因と関係しているのだろうか。現代高校生が高校を「日常生活の場」として捉えていても、学校は授業を中心に組織されているため、高校の意味づけは「学校要因」のなかの授業や学校内での学業成績から、とくに影響を受けていると思われる。そこで、高校への意味づけと高校での授業に対する理解度、もしくは学校内での学業成績との関係についてみていく。

まずは、アタッチメントについてみる。表の結果をみると、高校での授業がよくわかる高校生ほど、教師から信頼されている、もしくは好きな先生がたくさんいるといった、教師に対する愛着や信頼感が高くなっている（表3-6・7）。

表3-6 授業がよくわかる×先生から信頼されている

単位：%

アタッチメン 学校要因	とてもあて はまる	ややあては まる	あまりあて はまらない	まったくあ てはまらない	D.K.,N.A.	合計(N)
とてもあてはまる	11.3	43.8	26.1	12.8	5.9	100.0(203)
ややあてはまる	4.4	35.0	44.8	10.2	5.5	100.0(1224)
あまりあてはまらない	3.2	21.7	51.2	16.3	7.6	100.0(1273)
まったくあてはまらない	3.9	9.2	36.6	42.7	7.6	100.0(358)
D.K.,N.A.	0.0	36.4	18.2	18.2	27.3	100.0(11)
合計	4.3	27.1	45.2	16.7	6.7	100.0(3069)

表3-7 授業がよくわかる×好きな先生がたくさんいる 単位：%

学校要因	アタッチメン ともあて はまる	ややあては まる	あまりあて はまらない	まったくあ てはまらない	D.K.,N.A.	合計(N)
ともあてはまる	24.1	32.0	25.6	18.2	0.0	100.0(203)
ややあてはまる	6.9	39.7	42.7	10.7	0.0	100.0(1224)
あまりあてはまらない	3.6	22.0	52.2	21.7	0.5	100.0(1273)
まったくあてはまらない	2.2	15.4	31.8	50.3	0.3	100.0(358)
D.K.,N.A.	0.0	9.0	36.4	0.0	54.5	100.0(11)
合 計	6.1	28.9	44.2	20.3	0.4	100.0(3069)

学校内での学業成績についても、同様の傾向がみられる（表は省略）。学校内での学業成績が上位の高校生は、学業成績が下位の高校生に比べて、教師に対する愛着や信頼感が高い（「先生から信頼されている」では、55.6%→15.0%、「好きな先生がたくさんいる」では、44.8%→30.3%：数字については上と同様）。このことから教師に対する愛着や信頼感といったアタッチメントは、高校での授業がよく理解できる、もしくは高校での学業成績がよい高校生のほうが高いことがわかる。

次に、インボルブメントについてみていく。表の結果をみると、高校での授業がよくわかる高校生のほうが、当番の仕事をきちんとする、もしくは学校の行事に積極的に参加するといった、学校の諸活動への参加の割合が高い（表3-8・9）。

表3-8 授業がよくわかる×当番の仕事をきちんとする 単位：%

学校要因	インボルブメン ともあて はまる	ややあては まる	あまりあて はまらない	まったくあ てはまらない	D.K.,N.A.	合計(N)
ともあてはまる	48.8	33.0	11.3	6.9	0.0	100.0(203)
ややあてはまる	32.4	49.4	15.8	2.4	0.1	100.0(1224)
あまりあてはまらない	19.7	44.4	32.2	3.6	0.1	100.0(1273)
まったくあてはまらない	18.7	24.0	33.0	23.7	0.6	100.0(358)
D.K.,N.A.	9.0	27.3	9.0	0.0	54.5	100.0(11)
合 計	26.5	43.2	24.3	5.7	0.3	100.0(3069)

表3-9 授業がよくわかる×宿題をいつもやってくる

学校要因	インボルブメン ともあて はまる	ややあては まる	あまりあて はまらない	まったくあ てはまらない	D.K.,N.A.	合計(N)
ともあてはまる	17.7	40.4	21.7	19.2	1.0	100.0(203)
ややあてはまる	5.0	37.4	37.9	19.6	0.1	100.0(1224)
あまりあてはまらない	2.4	20.4	50.1	26.7	0.4	100.0(1273)
まったくあてはまらない	3.1	7.3	23.5	65.6	0.6	100.0(358)
D.K.,N.A.	0.0	9.0	18.2	27.3	45.5	100.0(11)
合 計	4.5	26.9	40.1	27.9	0.5	100.0(3069)

表は省略するが、学校内での学業成績においても、同様の傾向がみられる。学校内での学業成績が上位の高校生は、学業成績が下位の高校生に比べて、学校の諸活動への参加の割合が高い（「当番の仕事をきちんとする」では、81.2%→51.4%、「宿題をいつもやってくる」では、54.7%→12.1%：数字については上と同様）。このことから、当番の仕事や学校の行事への参加といったインボルブメントにおいても、高校での授業がよく理解できる、もしくは高校での学業成績がよい高校生のほうが高いことがわかる。

以上のことから、高校での授業が理解できる、もしくは高校での学業成績が上位の高校生ほど、在学している高校に対して愛着を持ち、学校の活動に積極的な参加をするといった、肯定的な意味づけを形成しているといえよう。

4. 本論文のまとめ

これまで、現代高校生のストレスを中心に分析を行ってきたが、以下の3点が指摘できる。

まず1点目に、現代高校生においては、高校卒業後に予定している進路とストレスとのあいだには明確な関係はみられないという点である。多くの先行研究が示してきたように、1970年代から1980年代にかけて、高校生は教育達成と将来の社会的地位達成の可能性との結びつきを強く意識していたため、卒業後の進路の違いにより、「勝者」／「敗者」を自己認識していた。つまり、「高校格差」のなかで上位の高校に在学している高校生は「勝者」、下位の高校に在学している高校生は「敗者」と自己認識する傾向がみられたのである。そして、下位の高校に在学している高校生は、「敗者」という自己認識のため、高校への適応度合いはあまり高くはなく、ストレスや欲求不満を抱えていたのである。

しかし、希望すればほぼ大学に進学することが可能となり、さらには現代高校生の学歴意識が低下するいま、こうした状況は変わりつつある。これまでみてきたように、高校卒業後にどういった進路をとるのか、ということに関わらず、現代高校生はストレスや欲求不満を抱えている。つまり、現代高校生は卒業後の進路の違いにより、「勝者」／「敗者」という自己認識をしていなくなっているのかもしれない。そういった意味でも、現代高校生のストレスという観点からみると、現代高校生は高校を「選抜・配分の場合」として捉えていないといえよう。したがって、「格差要因」が現代高校生の与える影響は弱体化しているともいえよう。

2点目に、高校生による高校への意味づけが、ストレスに関係しているという点である。つまり、自分が在学している高校に対してどのように意識しているか、という要因である。その背景には、現代高校生が高校を「選抜・配分の場合」として捉えるよりも、いまの高校生活を楽しむといった「日常生活の場合」として捉えている比重が高まっている、ということが関係しているであろう。その結果、教師に対する愛着や信頼感を持っている、または学校の諸活動に積極的に参加するなどといった、高校生自身による高校に対する主体的な評価が高校への適応の基準となり、そのような主体的な評価がストレスと関係していることが示唆された。

そして最後3点目に、高校への意味づけは、高校での授業の理解度や学校内での学業成績と関係しているという点である。すなわち、高校での授業がよく理解できる高校生は、いまの高校が居心地よいと感じ、それに対して、授業があまり理解できない高校生は、いまの高校はあまり居心地がよくないと感じているとみてよい。現代高校生の高校に対する評価は、高校で行なわれる授業に大きく関わっているといってもよいであろう。

これまで分析を行ってきた現代高校生のストレスにあらわれているように、現代高校生の意識や行動を規定しているのは「格差要因」ではなく、まちがいがなく「学校要因」である。とくに「学校要因」のなかでも、高校で行なわれる授業実践が現代高校生の意識や行動に大きな影響を与えているといえよう。高校格差という影響力が大きかったかつての状況と比べて、いまそれぞれの高校での授業実践が現代高校生に与える影響はこれまでになく大きくなっている。そういった意味でも、現代高校生にとって「高校」が意味ある存在になるために、それぞれの高校において授業実践を中心にした教育実践が、なおいっそう重要になってきているといえるであろう。

【注】

1) 学校のなかで「ムかつく」ことがある、というストレス状態においては、「よくある」と回答している高校生のうち、高校で学校(授業)をさぼるといふ行為を経験している割合は42.3%、「ときどきある」では33.9%、「あまりない」では21.8%、そして「まったくない」では18.1%となっている。以下同様に、飲酒においては、56.2%、49.9%、39.5%、34.3%、校則をやぶるにおいては、46.1%、36.7%、25.7%、23.8%となっており、学校のなかで「ムかつく」ことが「よくある」と感じている高校生ほど、高校で非行・問題行動を経験している傾向がみられる。また、はらがたつことがある、イライラする、というストレス状態においても同様の傾向がみられる。

＜参考文献＞

- 麻生誠(1979)「高等学校教育の発展と高等学校研究の発展」『教育社会学研究』第34集 pp64-78
- 荒牧草平(2001)「学校生活と進路選択—高校生活の変化と大学・短大進学—」尾嶋史章『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- 秦政春・片山悠樹・西田亜希子(2004印刷中)「現代高校生にとっての『高校』」『大阪大学人間科学部紀要』第30巻
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著(2000)『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 苅谷剛彦(1995)『大衆教育社会のゆくえ』中公新書
- 菊地栄治(1986)「中等教育における『トラッキング』と生徒の文化過程—理論検討と事例研究の展開—」『教育社会学研究』第41集 pp136-150
- Michel Foucault (1975=1977) 田村俣訳「監獄の誕生—監視と処罰—」新潮社
- 耳塚寛明(1980)「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集 pp111-122
- 尾嶋史章(2001)『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- 武内清(1981)「高校における学校格差文化」『教育社会学研究』第36集 pp137-144
- Thomas P. Rohlen (1983=1988) 友田泰正訳『日本の高校 成功と代償』サイマル出版
- Travis Hirschi (1969=1995) 森田洋司・清水新二監訳(1995)『非行の原因 家庭・学校・社会のつながりを求めて』文化書房博文社
- 米川英樹(1978)「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻 pp185-208

Sociological Analysis of Stress among Senior High School Students

KATAYAMA Yuki

In 1970s and 1980s, 'school-stratification' had a great influence on the self-image of senior high school students. So, it was effective to analyze behavioral patterns of senior high school students from the perspective of 'school-stratification'.

But, such influence of 'school-stratification' is becoming weaker under the recent situation that the ratio of going on to a university is rising. Consequently, there is not a distinct difference between behavioral patterns of senior high school according to 'school-stratification'. In this situation, I think that 'school-factor', for example lessons and school record of the school, would have a great effect on senior high school students, instead of 'school-stratification'.

Thus, the purpose of this paper is to explore the change of present-day senior high school students from the angle of their stress which is driven by adaptation to the school.

The major findings are summarized as follows:

- (1) The stress among senior high school students has no relation with their course which they will take after graduation.
- (2) Instead, their stress has a closely relation to the affection for the senior high school.
(concretely, attachment to teachers and involvement in school activities — based on bond theory)
- (3) And, the affection for the senior high school is influenced by the quality of classes and school record of the senior high school.

